

植物に関する野外観察の指導法の工夫  
学校およびその周辺の草本を中心に

東京都町田市立金井中学校 教諭 橋本 雅彦

研究のねらい

野外観察は、直接自然に接することのできる活動であり、自然を調べる能力・態度の育成に欠かせない活動であるといえる。とくに学校内や周辺の公園、空き地などの身近な場所での植物を対象とした野外観察は、身近な環境への関心を高める上でも有効である。そこで、学校およびその周辺の草本を対象とした野外観察において、生徒が主体的に活動できる指導法を工夫することを研究のねらいとした。

研究の内容と結果

1 質問紙法を用いた野外観察授業の実態調査より

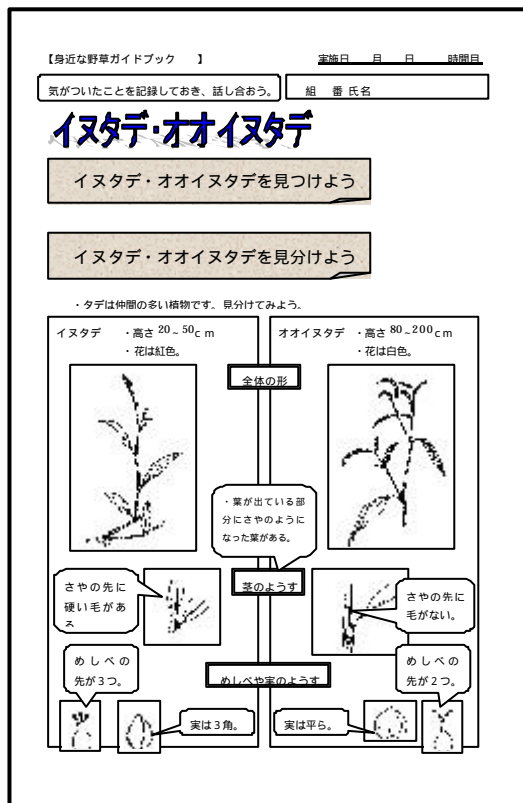
調査結果により、中学校の野外観察は植物に関するものが多く、実施時期は春に偏っていることが分かった。このことより、植物の多様性や相互関連性に気付かせるためには、季節に応じた植物の観察とそのための指導法の工夫が必要であることが分かった。

2 野外観察として取り上げる内容の検討

生徒が主体的に取り組む野外観察の活動内容は、感動を通して知的好奇心を高めるための指導法の工夫として、2つの段階にまとめられている(橋本 1999)。とくに「類似の植物を見分ける観点を知り、身近な野草のつくりを観察・分類し、植物の多様性や類似性に気付く。」という活動内容が、生徒の意欲を高めていることが授業研究より示唆されている。このことより、類似の植物を見分けるという活動を中心とした指導法の工夫が、生徒の主体性を高める上で有効であることが分かった。

3 ガイドブックの作成

「類似の植物を見分ける」活動を中心とした野外観察のガイドブックを下図のように作成した。



今後の課題

「野外観察ガイドブック」を用いた野外観察授業を行い、その有効性を確かめるとともに、「野外観察ガイドブック」のさらなる改善を図っていきたい。